

指導救命士養成研修について ～コロナ禍における 感染拡大防止措置を講じた研修について～

救急救命九州研修所
石塚 敦

はじめに

全国で新型コロナウイルス感染拡大が危惧される中、令和2年4月に新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が発出されたことにより、指導救命士養成研修（第1期）が中止となりました。この緊急事態宣言解除後、感染拡大防止対策を講じながら実施した指導救命士養成研修（第2期）の内容をご紹介します。

指導救命士養成研修の特徴

当研修所の指導救命士養成研修は、救急振興財団専任教授や著名な外来講師による講義（119時限）と、様々な指導・教育技法を習得するためのシミュレーション実習（113時限）を設けており、「救急業務に携わる職員の生涯教育の指針Ver.1」⁽¹⁾に示されている指導救命士養成カリキュラム（100時限）と比べて充実したもの（計232時限）となっています。なお、実習には「処置拡大追加講習」と「ビデオ硬性挿管用喉頭鏡を用いた気管内チューブによる気道確保の実施のための講習」の内容を含んでおり、加えて、東京研修所専任教授による「POT」や、訓練指導者として想定表を作成し、救急救命士教育に効果的な想定訓練の運営及び検討会が実施できるかを試される総合シミュレーション演習など、多彩なカリキュラムを取り入れています。

今年度の指導救命士養成研修について

研修実施前には感染症専門医から研修方法等について御指導及び助言をしていただき、各消防本部から研修生を迎えるに当たって、新型コロナウイルス感染拡大防止対策に万全を期して取り組むこととなりました。

具体的には、①実習室入退室時の手洗い・消毒

の徹底、②実習中のゴーグル及びマスクの着用義務化、③「密集」を回避するため、従来使用していたプロジェクターに加え、大型モニターを実習室内に2台配置して訓練展示場所を分散化する、④整列時やディスカッションの際には1m以上間隔を空ける、⑤実習マットの間引き、⑥使用資器材及びマット使用後の消毒の徹底、⑦傷病者役は飛沫曝露を避けるため、接触時から全て高性能人形を使用する等、過去に前例のない実習内容となりました。



講義においては、座席を間引きすることにより、フィジカルディスタンスを確保しました。また、「密閉空間」を回避するため、講義中も機械換気を常時稼働させ、扉や教室の窓を適宜開放するなどして換気促進を行いました。

コロナ禍での新たな取組

このような、様々な対策や制限を強いられる中でしたが、新たな試みを取り入れました。

一つは、研修のIT化です。従来は実習室内持込禁止としていたタブレット端末やPCを症例提示用として使用することを可能とし、現場活動において視覚的に判断している観察所見など、人形や口

頭付与では再現できない部分を写真や動画を活用して提示することで、より再現性を高めた訓練を実現することができました。さらに、教官展示においてもタブレット端末を活用し、実際に教官が想定訓練中にどのような評価をし、どのような記録、メモをしているのかを端末を介してプロジェクターに投影し、研修生全体に可視化することで、より効果的な指導ができるよう工夫をしました。これらIT機器の活用は、今後の新たな研修や指導、訓練手法として非常に発展性の高いものであると考えています。

次に、上記以外で今年度の研修中に示した内容を抜粋してご紹介します。

(1) 失敗を学ぶ

皆さんは手技訓練の際、過去に先輩からどのように実施すれば成功するのか、という指導を受ける機会が多かったと思います。成功方法のみを知っている者は、いざ現場活動において失敗した場合、多くは慌ててしまい、その後の手技が雑になる、ということが見られます。救急現場において手技の成功率を高めるためには、成功方法に加えて、いかに失敗につながる手順を知っているか、また、失敗した場合にどうすればリカバリーできるのかを訓練で学んでいるかが非常に大切です。現に、救急救命士研修課程において、逆血を認めなかった場合の抜針手順を知らないという者が多数いました。また、1回目の穿刺で逆血がなかった者は、2回目の穿刺時に清潔操作や安全な穿刺手技がおろそかになる傾向がありました。これは、1回目の穿刺で必ず静脈路確保が成功する訓練を繰り返して行っていた結果です。このような事例は、過去の救急救命士の手技訓練においてはよく見られます。そのため、リカバリー方法をあえて訓練して指導する、まさに訓練は唯一失敗が許される場だからです。「失敗を学ぶ」ということは、1分1秒を無駄にできない救急救命士にとって非常に重要です。

(2) フォロワーシップ⁽²⁾

フォロワーシップとは、チームが目的達成のため、フォロワー（リーダー以外の者）がリーダーの指示だけではなく、自らが考えて行動すること

をいいます。フォロワーは他のメンバーの成功に協力する必要がある、建設的な意見を述べ、自らも学習することによって、チーム構築に貢献することが求められます。今年度の指導救命士養成研修（第2期）は、全国95消防本部の研修生が受講しました。この研修を通じてつながった一つのチームとして、【傷病者への貢献】を前提に、病院前救護に携わる職員の指導・教育を行うため相互に協力して学習する組織を生み出すことを目標としました。そのため令和2年度は、2つの班が合同で行う想定訓練の際に、班の組合せを1想定ごとに変化させ、一人でも多くの意見や考えに触れてもらい、多種多様な視点から指導方法やフィードバック技法の習得を図ることで、非常に活発なディスカッションが行われ、研修生全体がフォロワーシップを体現することができました。

おわりに

九州研修所では、指導救命士養成研修で行った感染拡大防止対策を継続し、以降の処置拡大追加講習や救急救命士研修課程では実習会場や講義場所を分散してリモート形式で行っています。様々な制限を強いられる状況ではありますが、「慣例にとらわれず新たな試みを生み出す絶好の機会である」と前向きにとらえ、今後も研修所に入校される研修生が安心して研修に集中できるよう取り組んでまいります。



参考

- (1)平成26年5月23日付消防救第103号消防庁救急企画室長通知「救急業務に携わる職員の生涯教育のあり方について」
- (2)郡山一明「病院前救護学」医学書院